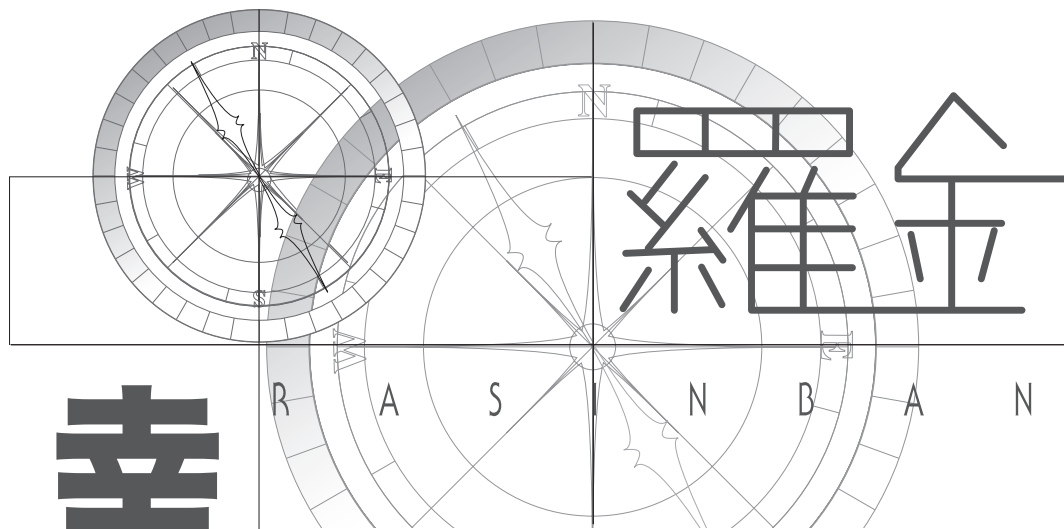


金住系 盤

COMPASS

http://www.hodoin.net

発行所: 東京都豊島区南池袋
一丁目十三番十六号
日蓮正宗法道院法華講
03 (3984) 2650

客観性と「霊言」と

人は何かを伝えようとする場合、おもに言葉を使います。そして、その言葉の指し示す内容は、自分と相手に共通の概念が存在しなければなりません。例えば、「コーヒー」といえば自分も相手も同じ「コーヒー」という実体を想像することができるといった具合です。このような裏付けのある概念の積み重ねがあつて初めて言葉による意思疎通や会話が成り立ちます。

また、何かを主張しようとした場合、私たちは、客観的に納得できる論理や筋道を使い相手を説得するようにとめます。その論理や筋道に矛盾があつたり、客観性に欠ける場合は、相手を説得することはできません。なぜなら、それは共通の認識を無視し、相互に理解し得る客観性を否定するからに他なりません。

例えば、わたしが弁護士であることを証明しようとしたとします。そのためには、弁護士バッジを見せたり、あるいは、法律の知識や実際に法が運用される判例等を語ってみせたりするでしょう。また、これまで関わってきた事件の具体的な流れを説明するかもしれません。相手は、これらの内容を聞き、わたしが弁護士であるかどうかを判断する材料にするに違いありません。

さて、ここに自分は、「釈尊の再誕にして、救世主たるエル・カンターレである」と自称する男がいます。ご存じのように、釈尊はインドに生誕し、様々な修行の後、五千、七千という膨大な教典を残しています。

では、この「釈尊の再誕」だと公言する男は、それを証明するために何が必要なのでしょう。当然、

釈尊の説いた教典の理解とそれを証明する細部にわたるきちんとした解説ができること、さらに、その目的、またその慈悲を体現している姿、その他、多くの根拠が必要なのはいうまでもありません。

ところが、この男には、それらの能力の欠片（かけら）も見受けられず、ただ、恥も外聞もなく大言壮語しているに過ぎないのです。この男が釈尊を模倣して行ったことは、自分の身の回りの信徒にアーナンダ（釈尊の十大弟子のひとり、多聞第一といわれた）の生まれ変わりだといったり、目連（釈尊の十大弟子のひとり、神通第一といわれた）の生まれ変わりだといったり、あるいは、天台大師の高弟の生まれ変わりだといったり、挙げ句の果てには、自分の生まれてくる息子は天台大師だったといったりするといふ始末です。もっとも、これらの戯（ぎ）れ言には何の根拠もありません。まるで、幼児の空想のように、ただ言ってみただけの話なのです。そして、この男に名指された人びとは、幸福の科学を批判して男の元を去っています。もちろん、釈尊の十大弟子たちは、釈尊の教えを批判して釈尊の元を去ったなどという事実はありません。「釈尊の再誕」などと、破天荒な戯言（たわごと）を弄するこの男の名は大川隆法、幸福の科学の主宰者です。

虎の威を借りた狐

大川隆法が（ほら吹き男爵）よろしく書き散らしたものに、いわゆる「霊言集」があります。この「霊言集」に利用された人たちは大変な数に及んでいます。具体的に挙げると、キリスト、釈迦、孔子、モーゼ、ノストラダムス、ニュートン、天照大神、卑弥呼、紫式部、親鸞、道元、坂本龍馬、出口王仁三郎、内

村鑑三、ピカソ、谷口雅春、高橋信次、そして、日蓮大聖人等その他多数、洋の東西を問わず、無制限に利用されています。

この無節操な「霊言集」をどのように考えればよいのでしょうか。大川隆法自身に語ってもらうことにしましょう。

「別に霊言集で問わなくても、わたしが書いてもかまわないのですが、……大川隆法の名前で文章を書き、発表しただけでは、世の人びとはなかなか信じてはくれない。……そういうことでもって、第一段階として今霊言集を続々と世に問うているわけです」（新・幸福の科学入門）

まったく、開いた口がふさがらないというのは、こういうことを言うのでしよう。まさに、大川隆法自身が有名人という「虎の威」を借りた「狐」であることを自ら告白しています。当然、その中身は、冠した有名人とは何の関係もない、大川隆法の稚拙で他の教団の教義を真似た言説があるだけです。このような「死人に口なし」を利用して、何を言ってもかまわないという姿勢は、宗教という名を利用して「詐欺」と言っても過言ではないでしょう。まったく、人を馬鹿にするにも程があると言えさせていただきます。

また、各宗派の教祖を利用したり、有名人の名前を利用する目的は、当然、大川隆法の著書や幸福科学の出版物を販売するためであることは一目瞭然の事実です。しかし、いくら「虎の威」を借りても「狐」は狐でしかありません。その中身を検証してみることにはしましょう。

「いまから一千数百年前に、天台大師が、中国の天台山で一念三千論を説いていたのですが、そのとき、靈天上帝において、彼を指導していたのは、実は、ほかならぬこの私でした。私が、そのとき天台

幸福の科学とは、どのような宗教か

大師に伝えた内容は、だいたい、次のようなものでした」（太陽の法）

戯言（たわごと）もここまでくると病氣だと思えるのですが、そういったのでは、話が進みませんから、その先を見てみることにしましょう。

大川隆法が、天台大師に伝えた内容とは、「思い↓想い↓念（おも）いとだんだんに力を得てくるおもいの力があるわけですが、……人の心には、念いの針というものがある。この念いの針は、一日のうちで、さまざまな方向を指し示し、揺れ動いて、とまるところを知らない。……人の念いの針は、すなわち、これ一念三千、あの世の天国地獄に、即座に通じてしまうのだ」（太陽の法）とのことです。他所では次のようにも言っています。

「人間の思いの性質、念の性質、これがどこにでも通じるという性質のことを、一念三千と言います。三千というのは、割り切れない数、すなわち数多いという意味です。」（幸福瞑想法）
つける葉がないというのは、大川隆法のような人物を指していた言葉だと痛感します。天台大師も変な人に取り憑かれたものです。怒りを通り越して、あきれ果ててしまいます。
一念三千について、日蓮大聖人は次のように仰せです。

「十界の衆生各互いに十界を具足す、合すれば百界なり。百界に各々十如を具すれば千如なり。此の千如是に衆生世間・国土世間・五隠世間を具すれば三千なり」（一念三千法門）
すなわち、十界互具・百界千如・三千世間と広がる心を持つ衆生の一念を、一心三観・一念三千というのです。法華経の最も大事な教義を、大川隆法のような浅識によって軽んじてしまっ、これを「推尊入卑」といい、仏法を貶（おとし）める悪行の最たるものなのです。

いまいし、大川隆法の戯言（たわごと）に付きあってみましょう。

「私は過去の聖者たちが思ったこと、行ったこと、考えたこと、悟ったことが、手に取るようにわかるようになりました」（太陽の法）

「私には、釈迦が菩提樹の下でひらいた悟りの内容がどのようなものであったかが、手に取るようにわかっています」（同）

「諸々の比丘、比丘尼たちよ、我はここに再誕す。我が再誕に気づけ」（仏陀誕生）

この妄想の中で舞い上がってしまったような男を、経文ではどのように説かれているのでしょうか。さっそく見てみることにしましょう。

「此の輩（ともがら）は罪根深重（ざいこんじんじゅう）に、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たと謂（おも）い、未だ證せざるを證せりと謂（おも）えり」（法華経・方便品）
このように、教典では釈尊を騙（かた）るニセモノを増上慢だと断罪しています。

仏教に無知な人たちをまことしやかに騙し続ける大川隆法や幸福の科学の罪は、未来永劫に消えることはないでしょう。

商魂丸出しの本音

次に、幸福の科学は、なぜ初めの霊言集が日蓮大聖人で、しかも日興上人を引き合いに出したのでしょうか。そして、GVA高橋信次に関する霊言集が二十冊にも及んで一番多いといわれていますが、なぜなのでしょう。この二つの共通点を挙げるなら、著書売る目的のためということなのです。

せっかく本を作っても売れなければ仕方がない。そのため買ってくれる相手を探す。そこで、宗教に関心があり、信仰心も厚い、日本のマン

モス教団創価学会をターゲットにしたのでしょうか。その証拠は、いの一に日興上人の登場があることです。教祖ではない日興上人を、一般世間ではあまり知りませんが、学会員なら誰でも知っています。まして、大聖人の名前が出てくるとなれば、買ってみたい、読んでみたいと思うのも人情です。ここを大川隆法の商魂が突いたのです。

そして、次の高橋信次に関する霊言集は、GVA会員を引き抜く手段として使ったのでしよう。教祖なき後、GVAは大変もめています。それが機に、かなりの幹部が幸福の科学へ移動したともいわれています。大川親子が、GVAに一番深く関わってきたことも多冊発刊の一因だったといえるでしょう。

幸福の科学の出版物がいくら売れようとも、それは、大川隆法の懐を肥やすだけで、会員の幸せとは何の関係もないことなのです。まさに、宗教とは名ばかりの商魂だけが際だつ、幸福の科学です。このようなエセ宗教は、関わった人を不幸に陥れる邪宗教といわざるを得ません。宗教に無知な土壌に咲いたあだ花、それが幸福の科学なのです。

真実の宗教とは

人は、苦しいことや悲しいこと、また困難なことに出会ったとき、それを解決し克服する方法について思いをめぐらします。しかし、その解決方法を見いだすことは容易なことではありません。

仏法では、生・老・病・死など人間だれもが直面する人生の本質的苦悩を根本的に解決する道を説き示しています。そして、その本質的苦悩を解決せずして、心の幸福はありえないと説

いています。

真の幸福とは、観念的なものではなく、因果の道理をもととした正しい信仰によって、自己の内面にある健全な生命を確立し、深い智慧と強い心を養うことによつてはじめてもたらされるものです。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を真実の幸せに導くため、最高尊極の法である南無妙法蓮華経を唱え出されました。その日蓮大聖人の教えを七百五十年間にわたって現在まで清浄に誤りなく受け継いできた唯一の教団が富士大石寺を総本山とする日蓮正宗なのです。

私たちは日蓮正宗の信徒として、法道院（池袋）で歓喜に満ちて信仰に励んでいます。どうか、みなさんも真実の仏法と出会って、かけがえない人生を光り輝かせてみてはいかがでしょうか。

